

ぶろぐ

四季の会・ユーザーズ・サービス

346号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 寒冷の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

私たち会計事務所も、厳しい複雑な社会に立ち向かっていくようです。経営者ほど厳しい仕事はないでしょう。格闘技に例えることができます。ちょっと油断していると問題が生じます。この問題を解決しようとする、異なるところから問題がでてくるのです。私たちも経営者です。

「天は経営者に困難な障害を与えるそうです。それには2通りあるのです。1つは、安易に逃げる道であり、もう1つは障害や困難に挑戦する道です。どちらの道を歩くかは天が決めているのではない。本人が決めているのです。」まさに「世間の学校」は厳しいものです。

世間は正しい、「世間の学校」がある

苦勞しながら、独学で地質学者になったヒュー・ミラーは、自分のさまざまな苦勞の体験から、「私が唯一正しい教えを受けたのは、「世間という学校」である。そこには『艱難辛苦』という厳格で高貴な教授にめぐりあった」と述べています。

まさに表面的な知識からは、実際に辛酸を舐めて手にした知識や創造性は生まれません。松下幸之助は、尋常小学校4年で中退しています。火鉢屋に奉公し、艱難辛苦を経て「経営の神様」といわれるようになりました。

イギリスに「学問無き経験は経験無き学問に勝る」という古い諺があります。いろいろなことを知っていても、体験的な裏付けがなければ、単なる表面的な知識です。しかし、松下幸之助のように正式な学問を身につけていなくても、さまざまな経験が知恵と結びつき真理に発展していくのです。まさに学問はなくとも経験に勝るものはありません。

現在の日本は高学歴社会です。しかし、立派な大学の卒業証書をもっていても、「世間の学校」の卒業証書を手にはしている人は

多くありません。経営者にとって「世間という学校」の卒業証書を手に入れるためには、努力、忍耐、一所懸命、涙、逆境、困難という授業を受けなければならないからです。

しかし、経営者ほど辛い仕事はありません。気を抜くことができず、一寸油断するとさまざまな問題が出てきます。後継者育成にも人材育成にも気を配らなくてはならない。また、毎日の眠れぬ夜も多くあります。しかし、そうした不安や心配に耐え、将来に夢を描き、お客様のために、新商品の開発や新技術の提供、サービス向上を促進することです。どんな苦勞があってもわれわれは、「世間の学校」の卒業証書を手にはしなければならないのです。

「お客様は」、世間の学校の厳しい教授です。お客様のニーズが時代と共に大きく変化しています。その変化を先取りして対応していかなければ、お客様は離れていきます。しかし、お客様の目は年々厳しくなっています。

サービスが悪ければさっさと他の会社に移っていきます。価格が高ければ値下げを要求してきますし、品質に問題があれば、即刻、取引ストップです。特に従業員さんの態度には厳しく、媚びへつらうような人は相手にしませんし、立派に育成された社員さんしか相手にしません。

どんなに立派な学校を出ている経営者でも、「世間という学校」の試験問題は難しく解きにくいのです。品質・納期・デザイン・価格・サービス・技術・提案・人財など、「お客様は一番厳しい教授」なのです。

「経営の神様」松下幸之助翁は、いまでも経営者の尊敬の対象です。『道をひらく』という著作も500万部を超えました。

その松下幸之助が、戦後の占領時代に財閥指定で苦しんでいるとき、「世間は正しい」と述べています。また、松下幸之助を「借金王」と報道する新聞、おそらく人生で最大の危機だったと思います。

艱難辛苦の日々が続き、睡眠薬を使用しても眠れず、お酒を飲んで、辛うじてひとときの眠りを過ごしたといわれています。内心では、松下電器産業もおしまいだと思われていたかもしれません。

しかし、そうした苦痛の日々の中にあっても、「世間は正しい。自分のやってきたことに間違いがないことを知ってくれる」と信じたのです。「経営力」とはどんな「艱難辛苦にも耐え抜く力」のことです。山あり谷ありの職位ですが、「世間の学校」の卒業証書を手にはしましょう。努力は必ず実ります。(理念と経営 11/2014 を参考にしました)

つねに向上心を持ち続けましょう

「世間の学校」は、「自分の人生は自分しか生きられない」という真理をもとに、その人の人生をかけてきたのです。人間のすばらしいところは、つねに向上心を持ち続けることです。船井総研の創始者船井幸雄氏は、経営コンサルタントとして、経営者

に「素直・プラス発想・学ぶこと」の「くせづけ」を経営指導で一貫した真念を持っていたのです。

私たちも税理士として、この厳しい時代に、お客様に対応していかなければなりません。それには船井幸雄氏の真念を私たちも持たなければならないかと思うのです。税理士の「一番の強味は、経営者と直接、一番肝心な話ができるということです。」

「いろいろな問題を抱えて、人に言えないこと」がある。そういう意味で、税理士の仕事は、もはや税金の仕事だけでなく、「サポート」「支援」「応援」等々。経営者に役立つことが最大のサポートになって来たのです。「決算診断」の目的は、経営者との「コミュニケーション」にあるのです。

企業は必ず決算をする。「社長の目で見える決算書」です。企業の決算書とは、1年間の経営成績と決算期末日の財政状態を表わす企業の成績表です。それは、経営成績を表すのが損益計算書。財政状態に対応するものが貸借対照表です。いったい決算書は何が書かれていて、何が書かれていないのか。決算書は会社の本当の実力、価値、損益等の源泉を表しているのかを、私たちは考えていかなければならないのです。

「企業は人なり」といわれ、「企業は社長次第なり」といわれます。企業は「人間が物をつくり、人間が運び、人間が売り、人間が買い、人間が消費する」という「いとまみのくりかえし」です。企業というのは、「利益を得るという目的のもとに」集約されるべく統合された「仕事の集まり」であると同時に、感情のある生き物である「人間の集まり」でもあるのです。

したがって、「決算書」のなかには、「仕事の集まり」としての計算書類とともに、決算の客観的な概要を書き、そのあとに「感情を持つ人間の集まり」として、社長の思いを「本音や反省」を文章にして残していかなければならないです。決算書の裏側の「社長や社員の意識や感情」がどうだったか、どのようにがんばったからこうなった、あるいは失敗してしまった、というような本音を文章を残していくのです。

「経営は数字なり」といわれる。数字だけで経営がわかると思ったら大間違いになるのです。「決算書」だけでなく、その数字の背後にある数字で、あらわしきれないものを見ぬいていくことができなければ、経営はできないのです。「企業は人なり」といわれる。経営を100とした場合、数字に表して把握できるものは30%、残りの70%は数字でとらえにくいのです。企業の命運を決める心のウェイトは70%。企業は人の心なり、企業は社長次第といわれているのです。

「企業は必ず決算をする」。「決算をしない企業はないのです」。社長は決算に最大の関心を持っているのです。そのために「決算書」の解説としての「決算診断提案書」があるのです。ここに「決算診断士」がいるのです。決算診断は『会社の全てを物語っている』のです。